夜裏之集

三拾三

33

△藤裏葉　十九　三十三

以詞爲巻名源氏君三十九之三月ヨリ冬迄ノ事此巻ニ見タリ梅カ枝ト同年ノコト也

讀杜艸堂

明ノ入内ノ御イソギナリ

△御いそぎの程にも宰相中将はながめがちにて（雲井イノ思ニテ）
カツハアヤシク 内モ思字ノリトソ大ハ我方ヨリ不云シテ前ニ内ノ嫡程アロ内ノ方ヨリ云セ下思ハシウネキ心ソクシ
ほれぼれしき心ちするをかつはあやしく我心
ながらしうねきぞかしあながちにかう思ふ事
関守ノ行モ 内フノ心ヨリ弱ルト八人ニシヌ我通ヨ関モリハ内ノ心
ならば関守のうちも寝ぬべきけしきに思ひ
よわるなるをききながらおなじくは人わろ
からぬさまにみはてんと念ずるもくるしう
思みだれ給ふ女君もおとどのかすめ給ひし事の（雲井）（中将ノムコニトタキリシコトニ）
すぢをもしさもあらばなにかこれはのは思ふ
六帖 ミコモリノ我恋ニサシキスキナラハ我カ片恋ニヲモロ恋ニセ
なげかしうてあやしくそむきそむきにさすがなる
御もろ恋なりおとどもさこそ心つよがり給し
カノ宮ト中将ヘ宮ノヨリタラバトシ
かどたけからぬにおぼしわびてこの宮の御忌日に（源ノ方ヨリ）

三月廿日大殿大宮ノ御忌日　大宮三月ニカクレ給フトミユ　アラハナリ　蘭巻ニ四月トミユルハアヤマリし

さやうに思ひまちて給ふなかばみとうくあるたる思ひ
うしばくりんあとへ見なめもまほしくわが露し
あさばまかも人わうりまつり世のばうつ給く
しきこしやましらん志のふとすまどうちくの
事あやはあわも世よりわふたるべしかうのくもの哉ら
りして給まけぬべきなめわとおがしなわぬらんへい
つまなくてうしみとけぬ世中なさばゆくわもなく
いひようむもいかに心おがしそゞうわさこゝとく
しきまそあさむもひとの思りんとゝ給なこなわ
いのあさはのでしてうは御のめうれべ哉あれう
御ばをふこ月廿日大殿の御かた寄の御忌日まて

極楽寺ハ昭宣公ノ建立　東北院ニ有内ヲ昭宣公ニヒシテミユリ　摂家ノモ代々葬所ナリ　ウツセミハカラヲ見ツヽモナグサメツ深草山ニ烟ダニタテ　見えもけ哉ナリ

給ふるはまうでゝあまへつゝ君たちみなひきはまいきさ
かのひかう侍りしも上達部なども参り侍れどひ
給へふかの寄中給かゝさくも参りひ世とはよか
しきてかうちなどたゞい侍るべきはうわり
まひりてとわあはれめでたき人の御有様なら
この給とくまゐはりしと思やみ給しもわれへく
まふも心はのひとつきていとかうかういのう井し
もて志ばめてものし給をあとに伝はまうわい給め
とゞめ給みなど種などい六条院よりもさき務給へつ
寄あ君はいましてよ給ば給とわりもちて給うれよ
ゆとなるつあうきの侍わ給みひつけてうれのへわ給

諸寺ヘ法事ニ布施ヲ加ル修行ノ使ニ殿上人モ参ルコトし

心ドキメキニ　夕ノ朴ヲ
内ノ九テ雲ノ一シ回臣
ニヤトノ九付給テ油ヲ円
フノ引テトゝし

巳ニ三ル面向トハ
大文ノ万事タノ一
内フ札給トし

かどをハられちわみぐるま遣寵とくさきふおもしく
むし（大文ノ一）おがし出て給へめよしかく義ゝやさきなかめ
給寧おもはられなほりぬれくしおよいとぐうち
こめわてはまけなわと人く乃さはがるな儀なりがめ
いるまで井り給へ里ゝ給ぞきこめまよりみ給ことを
はわらん袖をいぶよをそてふどいかゝちよなくを
わうし（かけシカニダウ）志たまへふくふのみのわれ思何（今）（大文ノ一）もこぞ
おがさはらにゆるし給てよやりつゝ（内ノ丸リ）すくなくなわ
ゆくすゑの世よおもひすて給へふかうるみ事こゝ
べくなどのきみへぞうちめしこまわて道（夕）小し
はおもむきたのこと義こえはたへまよきまよりうけ

心アハダシキ　給内刻
ホレバ手仏妙しトミゝ

君イカニ　両義し夕ノ
ムミシテハイカニ思例カ
ワリメニヒワラニト内フ
ノ一ゝ又君トスヲ
タキリノ一ニスレ双
地ヨリタキリシサシテ
君トキメルト可心得し

給りまをなくことと待しかどゆ（ウノ）（雲ノ一ニ北ス内ノ）るしなばはくゝおよりし
そくうわつしなぎきてこえ給ぎら給はハたゞしきも
はまりぎ入りえ飛ちるまへく小衆はひかへわ給ぬ君（夕）
いつ（名）ふ思て例なるはくしきおん給はらむなと
をとをりんとうけたる時わ（雲ノ一）らわなまはえるなき
事なる遣ぶるえてとくまわてとやかう座とおもひ
わし給ゝら此事はの思ひ此さるしまやうれ
おやくもふこうわなくおがしよばまてそうなきはぬ
でのまうさとは多くさはずよは（ヤノ沢テニ夕ヲ内へ詔ニ乱）ぶゝくしうくむ哉
おぼろ小宮月はいたちうら給まへの藤れ咲いと
おもしろうはまみぞれてよれはまれいろなりけり

拍シテ夕ヘ使アリ

たゞりみすぐさんことおしさはりかゝるふかくり
あそびなど志て蕃り枝のいとゞさまざまなるに
源中将としてはきうつこあわ一日の花のうけの
對面あらはおもし侍を法いと海つばさらわ
給ふんやとあわれふこそは
まつ宿の荻れきこふなたうれりたつる夜ハ
こぬ恵のなつらをまきてとおり給き枝りは巻
給へつまに影キリちつきて給へふもさゝ給とをめきさそうまで
うしこまわせし給
なのくるねわやまもとりむやちれ花たうれ
とまりのゝてくしくいとやゝてくれ名しくこそ

中く五文字ニ心ヲ可付
所ニ依中く心迷ユルニシテアルモイカヾトシニ
殊ノ外アルニヤ
貫之集　君ニ似ズニ
ヨカデノヘヌレハ藤ノ花
タソカレナモシラズヌルヲ

おりしにかまどかなし給へまときさてこゑ給御し
ともかくりとのたまへどすぐりしおずいまさんは
いふとそうへし給おとゞのおもへまてあくなん
とそ御諚ありてせ給思ふ座うきて物し給へは
まやかならんさもまくこりのし給ふぐあり世阿弥
かしうさのけうなりしうみもとけめとの給
御心をこゝろよなうさげなわりしもあらし
御かたのまへのぬちつゝまわ面白くさきてなかなを
志はのあうま給ぞひまれ遊びきんどまや侍らむ空
中将とさかひされいわくあなりやうまの
志給へとゆうし給ふのなうんびきさてはく間しく

浅黄ハシワスルムニヤコキハカロビメルトし

非参議浅ノ位迄ハ三位ニテモヨケレ今ヤリノ宰相中将ナレバ赤花ニアイナドハワカイ者ガアラントテ源ノ色ヲ顔ノ色ナシニハソトモヨ具ハニテ出ニ侍トナリ

たゞなかばは宗卿しちかきはまたにこくそうなびたなまで

非参議のうどなきとあふかの人こそかさね井は

ちかきまでひさしくはりんやとそかのはまうの心あと

みなよえなうぬ清ぞともおもしてはともありまさ

花供ハ源ヨリ夕殿ヘ帰花ハ供し

きさくまれ給わが（外ノ方）御方よそあばりのひへしく

けさうしーて（夕霧ノ内ノ行カ子孫ホドニテトナリ）夕ぬうれもすぎさん座まーきなどふ

まうで給へまあふしかの志だちせぬをはじめて

せいハ人うちはまでてむうへいまでまさるいづまでとも後ふく

おりしきからちとどもなまでど（タキリ）大殿（ナラント）ひとりはぐまそ

（帯ナニ）あざやか小袖よするかる花しらしすのしうのはさき

（君ナ主）うるづのし老ぞあわれしくなまし老養清く給りうきなど

カウザノキヤウザノトハホメタル詞しオゾエ〆ドし

源ハ王子メキタル斗改柄メカストし

し給ひよう并を清ふみそゝば御しういふわなど（冠シ内ノキ孫トテ）

志おりて出給とそ小の方此まるのき女房などありのぞ

きそてみゆぬまへいとかうはくりまびきまきは人なる

ようはなどいとゞ志ばりの小袖ゝしやわざやうふぬけ

いそぎたる老たるうたまちとておとどりも清さつま

さ海ありちうはゆまでが（源ハ）またいはたゞいとまちありみ海

めうしうわいけづきてみるり思まうしき世中

まは海にんちがし給おかや老ざ海老はこしたる

きそてわざれ序のたかしことりわずうし見たる（夕霧ハ）

ざえのきふはまもさつき出つ給まちい（仏）わし（大ヤウし）くしくすく

よりにうひさわ聖世あり常てためわなどの給て

春ノ花　面白羽ヽ
下心モアル花ヲ可
付羽ハアラハナリ

秋モヽ　夏ニコソ咲カヽ
リケレ友花松ニノ三尾
思ケルカナ

イロモハタ　紫ノユカリ
ノ心ヽ女ヲ紫ニヨセテ
雲井ニヒスル下ヘニヤ
雲ヲ友ニタトヘタル下
多

月ハ―　前ニ四月ノ
朔日比ト有テ夏ノ羽
フシアルカ別ノ事ヽ
巴云七日比ヽ秋末ノ羽ニ可見トニ是ニテ見レハタノ内ヘ宗祇下ハ
朔日皆リ云此ニテ七月ノ時分ニ宗祇ニヤ花切帋ノ示由

ひまぱくろひてうたいめし給ふのまのあ色ありけり
せんくし花は桃種をすこしこわよそへ毎の
春うよう伴ひ給ぬ春乃花いはまことなくみんあひき儀
出る色ごとかめおもふ給わぬは秋を給ふしかく
うちひそてちわぬふずうる花しうおがゆる給
秋ひこれ花比ひとわうちをくれて友のは花あをら
わどなんおやしまき給はまくはられ侍り花ヽ
待る比ろもそるな侍り花由のわかもこ侍わに侍
色しとそまちおりみえたまの人ゆかしまきて見ひ
きよげなわ月はさしいでぬまどむ乃さそざのふも
なれどある花もて侍らぶりさる給をまきて

文籍ニモ家礼ト八
ブニゼキニモカレイ八
右ヨミモンジヤノケラ
イハ左ヨミナリ タキリハ学文者ナレハ家ノ礼義ヲシリタニハ我タキリニ対メハ親方ニ思ヒスラ
ウラミタヘルニヤ史記云高祖幸父大公之家以家礼敬之高祖雖子君ヽ大公雖父臣ヽト云ヽ内フハ筆ト云位ト云
親方ヲタキリノ
思ステ花トウラミ給ヘ
ヽ花何花ニ妻

万ニ　カニコト云人ヨリモ
何ノミテ碎ナキスルゾニサ
リテ有ラン
タヾニ井テサカシラスルハ
何ノミテ碎ナキスルニ花
シカスヽ

おかみ花京わ侍おりびなどし給おもごおどなく
うら思ひをし給そみぶわがはしくまぬえりし
給をさはまう給しそいつうもまひあやめわまへる
すゑの世よはほまろまでほめのえさ比ゆううくよ
物し給めみ花よりひの心わめぬ人おもひすそ給
なんぼうわかる文籍にも家礼ならいこともあら
へくやな儒道しへもちくおわしまらんと
思ひ給ふ心をいさうんなやまし給とうしかんきこ四
べくかんなどの給て思ひあまよまやかしきおどふ
気さげなる給ふのでむかしを思給へ出るにうしろは
どもふふ方花をはるさ侍かもともう思ひまへとわ

一カラステノモ仕ヤサシト

一大音ヤリハト内ト母トヽ

此時ヨソトハ　内ノ時宜
ニ花ガニトミアリ
春日サス藤ノ裏葉ノ
ウラトケテ君ニ思ハバ
我モタノマン　是ヲ
為巻名

カゴトハカケゴトハ　雲ヲ
紫ガ落ニヨソヘテ数ナラズ
雲ニハカコツケトナリ
松ヨリ花テドハ　松ニ咲
コス花ヲトバドシ松ヲ
侍ニモタセテタヨリ
雲ハ手モウレタ
ケレ共ト
天盃ヲ持リテ庭ニ下
リテ拝舞スル是ハ
家礼計ニ盃ヲ拘ナ
ガラ拝持タノテイ

ねる袖いつか涙らんしげなほすみかはあへらん
もとより春すなる老いの涙れなこゝろあり～よと
あし、こまやかに参議とききすくきうとめて殿の
うら葉のとうち臣無しげたまへ参議気色袖ぬれて
松中将萬れさこくしとりふさなが枝を折わて
またうとの流月の月りさそふ事わてもそなや
むかあしし
むかし藤りのご恩に八つけむ藤れむまのほとお
浅ててうましたけのとも宴おさその月袖ぬなうる
いくまだうわさいしまわ竹さ庵いとよしはわ
いくかへわ　露[illegible]表袖すぐしきそそかの

嫋シヤ
婦人　手弱女人
多年夜来　如婦
雲モタニ添タラバタモ
ニサラニトシ
順流　ミツシテニヨミ
タレ共トシ夫ルルトシ

松ノコダカキトミヨリ
雲井ニヨセタルシ雲
ヲ下ルニ

アミガキ　サイバラシ
芦垣ノミガキワケテテフコズ
トハレ二ハテフコズトタレ
カレーシ親ニモウヨコシテラシモ
シトヨメカ親ニ告タルトテムルニ
オトヾノー　文選

ひもとをおわかよあふらん頭中将あり参らんば
たをやめ袖よまがへ涙ぬちの翁やうるひと
うらやきもまきらんほどよくたり哭成臣無なすが道
おほうためそ遊びるえひのまの記まありそうくし
うらでこれよわ庵そう臣七日の夕月秋のけ
ほれすなる小池のうくみのとうふすとわすわぎま
ますかれすなる木ずゑども花のさけしきこ涙
なほよいしこいふたうくしきさかんよこたまれは松の
まづうきかとよはなのめぬよみてれる花のさ庵よれ
つのなうかにおり涙し例乃世のおねらゐいと
なみだし[illegible]

年ヘニケル 内弁ニ是ヲ添テウタヒクニヘル〻河花ニハ芦垣ノ平一ニ年ヘニケルト云 問ハナニシウメヒソコナヒタルヤト云リアヤドレ
三段トドロケル此家ノトミハ落ブレタルト云フ一ハ祝言ノ夜ナレバ内ノ思テトドロケルトウメハセテハト思テウタヒカヘ拍〻物語一部ノ
ニナヨガ面白キ也し
ケザヤカニ〻

走道ヒダノタノミノテヲ
ノ音ホドく〻シャルメ
シモ見ミ哉
ヲドロく〻おかん

花ガカケノ一〻内雲ヲ
ユルシタニヘ氏タノアタん
ニテハ一夜ノ旅子ノ
ヤウナドアラシ名ヲ一ハ
若ニシカラント〻
松ニ一〻 両義松ニ友
ノ千ギリナレバアダニハアラジト云一義例ニモメセテ内ニ谷ウケテラレタルチギリアリノニハアラジトナリ
六帖 トキハナル松ニチギレル友ナレド ヲノガ此トゾ花ハ咲ケール

巻うも得りうまで御ふうあとおみずまで通ひてきゝしへは
名高るの家れとうちきく人たまの〳〵御郷に忍びと
おりし後は おりしきれどふみさわがいしまゝ清
あうびわて拍おりひのこらびすがぬめわ扇うく
夜ふきゆく雁有りいるまで空なやそをしてみだれ
んちいとさん、おさらてきのあでん宮もみどノくさく
こう侍るとぬべ名れ夜の頭ゆ借わ拍てん今と中将よ
うま道へ拍わしらで拍はや清座ににかとめよおはしまず
いくさうえひとここそてもさいわれば海うわ入ぬところひ
すてゝいると拍ぬ中 拍花乃うげけ聲のよいつまでや
くるしきた給ひ ありけ侍やとゆんど松ぬち浅ま道給ハ

ヨノメシ 雲ヘノメニフ
伊勢集 忍スルハ
シスルやトハキカ子氏世ノ
タメシニモ成スベキ哉

サカ拍ノサイバラハタメ雲
ヲエ分タメれニイハン
タヌウメヒタルハイタし 拍子分ナトし

あさなりむうはゆうしゝやときゝあ拍中将はまつ後乃
うちふさきの乃わざやと思ふ心はまたど人のなまの思ふ
さまのありめでたふふうりともかうなんともゝ後よき
わるふうりなきばうし後座くみちびきさはだおとこ
君ハ夢うをおもく拍ふもやうがすいとゝ給ひぬ
身捨光し拍ひらんう一母はいとこ給しと思ひ
忘れてもの一拍も拍ひきされぶ御ー有様いゝとゞ
あかぬ雨なくめやいし一世乃ためしふもなわぬべ
うわつぶ方をよろ後まで秋ときへまのぞをおかし
ゆるさ海めまた忘ともわ拍りぬもさ夜さと おやふわぎ
うれとうしうえばゝ拍かねのむさこいず けやふあし

河口　サイバラ　呂
河口ノ関ノアラ垣ヤ守レモ[illegible]イデテ我子ヌヤ関ノアラカキ　川口ノ関ハ伊勢ノ国ニアリ　六帖ニ河口ノ関ノアラ垣守[illegible]モムテ我子ヌ忍ビ[illegible]ニ我子ヌハシノハンスし
雲ノ一門ヘ我ネヤーツヨク守リクモヒシカモワ[illegible]ニケテ内ノ方ヨリイハニホシヤリツルトハウタヒカヘサバヤト思フレモト泡タニヘハ雲井イ下丈
クルシク思召テトし
内ノ方ヨリイカれニ云ナシテカタニハ[illegible]アサノ云ヤサルヽヤトヽタノ詞ニ哉子ヌトアルニ付テ守ル人ハイカヾ云ナシタルニヤトし

すきのおもむきハ見くとくめ給はやいたさぬし
おなつこのハくぢのところぞしらぬ人まかしうわ
はまとの給へは安そことまくあしとおもして
あさきなをいひなかしくに川ぐちをいふく
もとし関のあくがあさましとの給さ？いと
うめきたはしうちわらひて
もわかりくぎだの関を川ぐち此何さきり
のみいおふきざるなん年月はもわもいとまわ
なくおやうしき物おもしはと思ひりかちて
くもしぐよもてなしてはすゝもえてばずかなわ
ひとくきてえまはらぬをおとくゞしたわがかなる

イカバモラミヽ関ノトアルニ付テウノーラ云モラスノミニテオハナキトし　白川ノギタノ関守六十人ニテツヨクモル関ヽ奥州田ノ関モ自人アバ有トシモル人ノトガ汁ニハナキトナリ
年月ノツモリ　タ年月ノ思ノツモリート碎ニカコツケテ明ルモシラズ白ニ卸指トし
王スダレ明ルモシラテ子ミモノシラ？「ニモアル二ト思カケキヤ詞斗ノ川？
俗ニ云ニコヤ三ニクル[illegible]

アヤニハテハトハ夜深ノウキ立指トし
後朝ノ文
文ハ宅ヘ取カハミダ二ヘ忌キギリアリテハ中々セヽリハデ指トし
忍ビミホドノ回ヲ手ノタユキホド袖ヲシホリツルニ今日ヨリハアラハレタル袖ノ？トナレバ人モトガムナトし

あさいうかどやらがめ給さまぜにうめりしまてく？
いそ給をきれ乃？しあさかなかるうひいのわりし
後文いなかまこおひやわけるさまのこ給はうひまそ
あなか中くくふハえ宮へ給りぬ思を物いひけがなまぬ
ごたちはなーろふよおとくにわらてみ給ずいと
まわなさやつよをざわける御？しまへ中こ
いとく思まつく？れほどう丸たえぬこ給ふきまる
参くぬバ参も
とくがむなよまのひりまか字ても？あ？こくふ
あつえ？し袖のまはも残なといと？まなまかなわおお
思こてまをいかへしくもつきなきれよなりの那など

右近ノゾウハ右近ノ将監ノ未叙爵ヲセザル人ヲ云ヘタキリノムコニシ召使イ給ヘル人ト也使ノ一ツ双地ヨリ云ヘシ

のはもせうしのあこうわなくしはたゝしいとにいそぶ
うさけあれば内侍（内ノセンジノキ）しやとてもおほくおもいかうわぬ（内ノ井タニテ内ハヂテアカト内フ御給トし）
べきうちあれはわうわ給ぬは使のほくなんてなうぬ
はまゝ小舎人へ宰中将（柏）殿の（タノムヲモテナシ給トし）思さまりもてなし程
はまりひきすくしつゝあく給へあわきし御
はかひきふハおもしちなど人くさくゆうまゝめわ
右近乃ぞうなる人のむはましくお前はうひ程
あわかわ六条乃あたりともかくせきこしめしてぞわ
宰相おほゝうわもひうわそひて来わ程へまでうち
ぬりわ程てけさ（源氏）といのり（後朝ノ文）ふみなどものしはや
はかなき人をあはれすなはみごゝろしためし ある前を

人わろうかしはべらひはべりつるいうまゝぞすくされたる
なんはし人よぬき（スゞシメルトホメ給ヘし）ふわ久保はたゝうはしと覚えてはべ
おとこの（源氏ノトラクヘ）御なきて（雲ノヲキテ）のはまうとすく（スグスル給ヘ）なんてはうわなく
をはにほまほ給ぬるをよ人もいひはふことあるんや
さ（タヘスエス）わこそもわか方ゑけう（ヒゞシタリ良ニモ川ワト思召テトし）思ひかるゝ心をとゞめしして
はえへくゞまふ御うかぢへなどりうし給なさう（内イラシタ）給
おいひうふおかきなくゝ心おきてとこゝはまでとこゝさの
みづへ物しゝうはをさはまでて人なくゝかくきあ
はまき程へあ人なかなどきんの答しへ思ひこたまふ
たゞ（夕雲ノ中）とう物わひめや はえ御おひとおかさはまき（夕顔ノ…）
ともみえはこしかちのかこえさりわとみえなはべり

一人〳〵見テハ除タ
円良ノ花十七モ似ニ今ヲ
見レバ別トシ何モ云シ
花ナキテイトシ

行のまそてはおなしうかをとうほしとわさ為とこへ
ゆゐをきまへまそてはさ捨くはなめてさとゆへし給

ウス花田 白キ上袈裟
トシ除ノ素束シ

へるまたかくはうしき法華すきぬき御うれう 廿九
めきう給がもんけさやうまつ座くとすきう給ば 中 十三 スキトシル
まちて打はぼぬをばあてよなまめしうおしはへ
寺ね座ハ為しきふつきの三所御しよすぎあれ 十九 花田ノ色コキ
（白キ上ガサネトシ）
さのおくまてさめおさい後なおやれなほうし戒識

灌仏ハ卯月八日仏ヲ作テ水ヲアビセタル也ヲ云ニ国史云承和七年四月八日請律師傳灯大法師位静安於清涼殿初行灌仏事ニ河海云灌仏ノ布施貞観寛平八年四月八日定法文法親王銭五百文大納言四百文中納言三百文参議二百文四位百五十文五位百文六位并童五十文親王大臣ハ布五帖大中納言八四帖五位ニ帖六位並童一帖カトニハ童持テ出テ灌仏ノ導師出家ヘ下シ

き給ハふさいとさうめきてえんまえのくまん仏めして
まわて法導師とうく条わるまつ日くれて濡し
うさくまわりてもゑりのかきなどおかや蔵

御門ノ御前ノ作法ヲウ
シテ君達ナドネ残テ
余院ヘ余集伝トシ御門ノ前ヨリ也六条院ニテハ公光ニテノ君達皆ヲクレガナ外トシ布施昔ハ銭ガヲ後ニ紙ニ裹舟ノナリノヤウニツツムニヤ ニミト名付トシ

ざまふのはらびおう給くうりき給へのきまへんの

さかうをさほしして素達なども条わほどひてなすり
なのうふりしおこきんしわもおやしうん法のひ おまへ
をうまそおくしがちあわ筆ねはさほおう給なく
いよくきさうしひよ法くろひて出給けさやう 雲井へ 外ノ人ヲ外ケ給ニテハ于ケレモトシ
なうものとなきけぶき給わりの人をうろの心思ふも
あわれわ筆法のほもわとわえんて思ふやうなる

伊勢物語 ナドテカク
アフコカタミニ成ニケン
水モラサジトムスビシ
モノヲ

法なうろひふめまさいだほもうむ屋ハおはしみ
おとゞもいとゞしきちの海さわ給うほうしき題よ
おがしていおへしうまそりしほふ給まけめるかさの
くちおし法ハ打おぼきとほえも残るまうしうまおめ
座りなふ法んさまなど比筆法うと心なくひぐし 化ニナシ雲井ヲ

タイノ上ニミアレニ紫ノ上カモノ祭ノ朝ニウデタマフヘルヿハ紫ノ上今ヲサカリハメ威光家中ノトキハカモハ四月酉ノ日也其アカツキニマウデ給フ御生トテ又形モ形アラハシタマヘルト云ニヤ神舘ニアル所也祭ノ日ノ旅所ト云リ祭ノ前ノ日ノ生ヲ祭ルヿアリトシ俗諸ニハ禊トテノイソギノ日ニ云ニヤ但ニ祭ノ前ニ有ヿト可心得ノカタ明花ナドヲ紫ヨリサソヒタマヘルトシ

折ふしことにはかなくおかしうゆるさ宰相の君の御有様などいとゞ花盛りにてめでたくあるをば北方さふらふ人々なども心よからず思ふもあれど何のくるしき事かあらん、あぜちの北方なども、かゝる方にもうれしく思ひきこえ給ひけり。かくて六条院の御いそぎは廿よ日のほどなりけり。たいのうへみあれにまうで給ふとて、例の御かた〴〵いざなひきこえ給へど、なか〳〵さしもひきつゞきて心やましきをおぼして、たれ〳〵もとまり給ひて、こと〳〵しきほどにもあらず、御車廿ばかりして、御前なども、くだ〳〵しき人かずおほくも

花明ナド自カハ出タニハズ紫ノ供ニ女房ノ汁

紫ノ桟敷ヘ源氏ノ在モヿミエヌニヤアラハス紫ト同車ニヤ

其ホドハ葵ノ死去ノトキハ時節到来根ト云フハナキトシタルカトシ

あらず、事そぎたるしもけはひことなり。まつりの日のあかつきにまうで給ひて、かへさには物御覧ずべき御さじきにおはします。御かた〴〵の女房、おの〳〵車ひきつゞきて、御前ところしめたるほど、いかめしう、かれはそれと、とをめよりおどろ〳〵しき御いきほひなり。おとゞは中宮の御はゝみやすん所の車おしさげられ給へりしおりの事おぼし出て、時によりこゝろおごりして、さやうなることなん、なさけなきことなりける。こよなく思ひけちたりし人も、なげきおふやうにてなくなりにきと、そのほどはのたまひけちて、のこりとまれる人の中将は

カモノ祭ニ近衛司ノ使
内侍ノ使トテ必有事也
己ニムレヒモ近衛
使ハ伯父ノ子息中将為代カザリ車ナドニ乗テ東遊ヲ具セリ 東遊ヲ[illegible]ニ
舞陪従ヲ具スルナリ と衛ノ被官タリトミニ
大殿ニテ出タツ源ノ
サジキヘ参タル上達メハ柏ノ所ヘ何モ先参給ヒテ柏ノ出立タニヘル
下ニテ何モ装束ヲ改テ源ノサジキヘ参給トナリ

かくたゞ人にてわづかになりのぼるめり宮は（秋好）
ならびなきすぢにておはするも思へばいとこそ哀
なれすべていとさだめなき世なればこそ何ごとも
思ふさまにていけるかぎりの世をすぐさまほしけ
れどのこり給はん末の世などのたとしへなき（源氏ヨリ泣ニ紫）
おとろへなどをさへ思ひはゞからるればとうち
かたらひ給て上達部なども御さじきにまいり（源）
つどひ給へればそなたに出給ぬ近衛つかさの使は
頭中将なりけりかの大殿にて出立所よりぞ人々はまいり給
けるとうないしのすけも使なりけりおぼえことにて（藤内侍へ）
（一 惟光カ娘ニ乙女ノ巻ニテ宰相ヨリケ給人源ヨリ仕立給乙女ノ舞姫也 其時ヨリ今テニタノ心カヨハシ給ト也 此トキカモ祭ノ内侍ノ使ニ参ル也）
内春宮よりはじめたてまつりて六条院など

カザシハカモノ祭ニ葵ニ
ヨセテ カツミツハカツミ
ミルヽヲボメクハ覚束
ナフノ心ナリテ
覚束ナキホドニ成タル
トイフ也

桂葵ニ対シテモロカヅラ
ノ一ツハ桂折人トタキリ
ヲサシテトタキリ文章
ノ生ニ入給ヒ称ハカザシテ
ヨウトムトハウスレタルト也
輪送ニ菅原文時冠ニ作リケル夜毋ノヨミ作リケル
ハ風 桂ノ系門也
タヾ博士トヨソヘテ云詞也

よりも御とぶらひどもところせきまで御心よせいと
めでたし宰相中将出たちの所にさへとぶらひ給へり
うち〳〵にもしのびておもひかはし給へる
中なればかくやむごとなき方にさだまり給（雲井へ）
ぬるをたゞならずうち思ひけり（藤内）
（夕）なにとかや今日のかざしよかつ見つゝおぼ
めくまでもなりにけるかなあさましとあるを
おりすぐし給はぬばかりをいかゞおもひけん
（双）いとものさわがしく車にのるほどなれど
（藤内）かざしてもかつたどらるゝ草の名はかつらを
（タキリハ儒者ナルハシリタミトハントシカツラ折トハ今ハ課試及才之一ニ作リ来也 久堅ノ月ノ桂モ折バカリ家ノ風ヲモフカセテシカナ）
おりし人やしるらんはかせならではとき（両説也）

はかなきあとなきまとゝまさこさいへとおほちおほこの 双
内侍よりも思ひけれまはりひかの紀主殿べきなくて御
（明入内）まいりかはりしのりたまひ給へる（御ウチサス）をきこゆるにたゞく
しをはえたまひたまひありしかともつきてあり
られ御しへ給ふ（実母明石上ジ）きやうんまさしとおぼえさいとも
（実母ニ姫モアヒタニハデヌサト）御いふあはれにおぼすなかくへたてゝ（人ナニニデ）そはぐしなを
（明上）うれ人をもまれしと思ひたけなるらんさ（姫）おほ給ふ
いもさいは思うくおほつかなく思ひおぼしさる
らんもかくしくなるをれまさんとおいなりしと思ひ
なれ給て（常内原へ）これおかりへまかり給へきものさいと（姫ノ幼少）おもへさ
あるなどもうし給めたまふさまいふ人とそおり

万水ニ云乳母也モ凡及ニカギリ有テコソヤ原ニハヤサシトモ此義可然
又乳母ヤウノ人ハ心ニ及カギリコソヤセ原キ事ニテハ心及ニシトナリ
尼ハ明石上ノ母
わかの君の御こゝろおかゝれ給めれとうちなどもも
みなよろこふとれ心わさうおかおかはるゝと見えはうらい（付御秘方）
えいとしもとゝみかさむいかとうし給座はうな（明上ヲ付給へ）
へかのきさてえ給へきいとよくおかしよ給うなかる（原ム）
おかしてさなんと御かたにもうちらひの給なまほ（明上へ）
いかしきられしと思ふ事ゆふかひ給ふへちしそ
人のさうがくなまされすも座んおとなきにか様よ
をとゝ給まうしさいうきゝうつはま思なんなる給にこれは（尼ム）（明上）
おもひさまさん事らむの心ふうくつゝくふいぬるとたひ
みまる世けりやといのちなさんへさうまかなりしてまん
しゝる給いまいしきのはと思ふもかなしきすれ夜ハ（姫入内ニ付テ上リタラバ明上ニ逢ヿカタキト）（入内ノ夜）

此時紫ノ上輦車ユルシ可給ナシ明石ト同車ニ放
明上ハ紫ハ同車ニ乗テ
ルヲ立下リカナニニノ
付添行ナバ人目ワロキ
事也

うへそひてまゐり給ふにさて車にもたちくだりあゆみ
など人わろかるべきをわがためは思ひはゞからず
たゞかくみがき奉り給ふ玉のきずにてわがかく
ながらふるをかつはいみじう心ぐるしう思ふ
御まゐりの儀式人の目おどろくばかりのことはせじと
おぼしつゝめどおのづから世のつねのさまにぞ
あらぬやかぎりもなくかしづきすへ奉りて
うへはまことにあはれにうつくしと思ひきこえ
給ふにつけても人にゆづるまじうまことにかゝ
ることもあらましかばとおぼす大臣も宰相の君も
たゞこれひとつをなんあかぬことかなとなん

春宮ノ御前ニテ明ト紫ト
御対面ト也

明ノテイヲ源ノ御覧ジテハ
紫ノヘトメデタシ紫ノ
思召ト也

おぼしける三日すぐしてぞうへはまかでさせ給
ふたちかはりてまゐり給ふ夜御対面ありおとなび
給ふけぢめになむ年月のほどもしられ侍れば
うとうとしきへだては残るまじうやとなつかしう
の給ひて物語などし給ふこれもうちとけぬるはじめ
なめりものなどうちいひたるけはひなどむべこそ
はとめざましう見給ふまたいとけだかうさかりなる
けしきをかたみにめでたしと見てそこらの中にも
すぐれたる御心ざしにてならびなきさまにさだまり
給ひけるもいとことわりと思ひしらるゝに
かうまでたちならびきこゆる契りおろかなりやはと

後セニ ウレシキモウキモ心ハヒトツニテワカレヌモノハ涙ナリケリ カキテノ心ヲ引カヘテ一ツモノニテハナキトシ

思ひかけりいで給はきのいさとによ力しを
はて東二條院さま出給て女御のはらはらまに
ことなりぬと思ひくらすにさいはがなる方のなど
なかいとうはくしきるひいなの庭あるは有様を
夢のさめたる心地してみすぎはなのいかばかりぬは
ひらび物とも見えしさわきたる年はよ給はずにけさ
きはゝはましくうき方からおりひとしはさきる
のべまかしうれましくとききよはきてまうしり
すみよ此神も御のなきは思ひしうは物りふ
さ後ふりしはれ君にてさ給をよりぬこともる
おきくなまよ人にかくしさなるは大かたの

イドミ給 梅ガ枝ノ春ニ云シ左大将 左ノ大臣ノ娘 明娘ノ先ニ入内ノ人

敵上人 明女房メチニ心ヲカケ争ヒニトテ思ニ付跳ノカハルベシ ハムレイドムムニ成

よそおぼしわけしめかんてなりぬはいはさま
かちなに宮もわのきはんかよいとう給ふに
思ひさくる給へつといこのみたまへに御方御
人なとかこの母君乃かくてはふらひ給ふをさびよ
いひなしなどはまどろまふけいかへくとあり
ゆかあけしきならひなかなるなにとまりものいは
ことなるをよしあはれけうひ給けるかき事あり
つきてもありし後ほしくもておもしろくまば
勢上人などもめはらしきいひことはやせにわくに
さることに人にもこ給ひけたる女房のうちい有様
さんいとしきとしのへかし給へるまうんもふはべ

おりふしにはまいり給ふ御なからひあらまほしく
うちとけゆくにさりとてさしすぎ物なれずあな
づらはしかるべきもてなしはた露なくあやしう
あらまほしき人の御ありさまこゝろばへなり
おとゞもながゝらずのみおぼさるゝ世のこなたに
とおぼしつる御まいりかひあるさまに見たてまつり
なし給てこゝろからなれど世にうきたるやうにて
みぐるしかりける宰相の君も思ひなくめやすきさ
まにしづまり給ぬれば御心おちゐはてたまひて
とげなんとおぼしなる対の上の御
ありさまの見すてがたきにも中宮おはしませば

おろかならぬ御心よせなり此御かたにも
世にしられたるおやざまにはまづ思ひきこえ給ふべ
ければさりともとおぼしゆづりけり夏の御かたの
時々にはなやぎ給ふまじきも宰相のものし給へばと
みなとりどりにうしろめたからずおぼしなりゆく
あけん年四十になり給ふ御賀の
ことおほやけよりはじめたてまつりておほきなる世の
いそぎなりその秋太上天皇になずらふ御位え
給うてみふくはゝり年官年爵などみなそひ
かゝらでも世の御心にかなはぬ事なけれどなほ
めづらしかりける昔の例をあらためで院司ども

源卅九ノ秋ニ天子ノ父ナラデハ太上天皇ノ号ナキ事ナレバ源ハ世ニアラハレタル父ナラザル故ニナズラフル也位トミヘシ
准三后ノ心ニヤ
御封戸年官年爵皆加リタルトミヘシ

昔ノ例 法性寺ノ入道ニ関白度々封戸加ル其例カ但昔ノ例ヲ改テト云心カ デテ同心ニテノトキハ昔シサグリ改テト云ヘシ デノすハ昔ニナガハズ昔ノ例ノ如ト云ヘシ

院司ハ別当判官殿上人蔵人ノ服(?)武者所随身等ノ諸位諸事行不残源ヘクワヽリ給トシ

太上天皇ハ作門ヘ余門不成也

なりてまさしくかいはさしうちわたり給へば内よ（ナリユクサマ也）
まいり給へきことかたかるへきをそかつはおほし
けるかくても猶あかすみかとハおほしめして世中を
はゞかりて位をえゆづりきこえぬことをなんあさゆふの
御なけきくさ成ける内大臣あかり給て宰相中将は

内ノ太政大臣ニ成給 夕キリ中納言

中納言になり給ぬ御よろこひに出給ふひかりいとゞ
まさり給へるさまかたちよりはしめてあかぬ事

アルジノオトヾ 内ノタキリヲ見テ中々雲井ヲ官仕ニ出シテ人ニケシヲサレンヨリハニサリタルト思ヒナラシタマヘルヘシ コキ殿ノ女御ノ秋好ニヲサレタルニヨリ思ヨリタル下ルヘシ

なきをあるしのおとゝもなかなか人におされまし宮

女君トハ 雲井ノ乳母ノ 太夫カタキリヲ六位宿セトアザムキシヲ タキリモノヽカリミワスレタマハザレバナリ

つかへよりはとおほしなほる女君の
大ふのめのと六位すくせとつぶやきしよひの
ことものゝおりおりにおほし出けれは菊のいと

浅ミドリハ六位ノ袍ヘコキ紫ハ三位ヘ乳母ノ太夫カ六位スクセトアザムキシカハ中納言ナドニアガラシテモ思モカケザルヿナリシト也 花云袍ノ色ハ衣服令云一位ハ深紫二三位ハ浅紫四位ハ深緋五位ハ浅緋六位ハ深緑七位ハ浅緑八位ハ深縹初位ハ浅縹 深縹ハ花田也 初位ハ浅縹也 深ヤウノ一ハ深紫ハ紫三斤ニテ染浅紫ハ五斤深ヒハ茜ニ紫ヲ加ル浅ヒハアカ子計也 深緑ハ藍ト苅安ニテ染ル浅緑ハアイト黄ヘキニテ染ル也 縹ハアイ計也 今世四位以上袍ノ色トジメノナキハ一条院正暦ノ比ヨリ如此乱レリト小野右大臣ノ記ニ見ヘタリ 又紫ヲフシ金ニテセルハ女工所ノ安キ宮ニシタルヨリオコレリ 貴ノ字ニアサミドリトヨメルハ七位ノ衣ノ色也 六位ナラハ深緑ニ成又三位ハ浅紫ナルヲコキ紫トヨメルハ一位ノ袍ノ色也 加様ノ字ナドハ大かイ也 云フハ次ノ一ナリ 醍醐明条浅中納言三成トキ九条ノ右大臣袍ヲ紫ノ色コキニテハシラザリキ此代ハジメノアヲニノ羽衣トヨメリ 後撰ノ字ニモトヅキテノセストテコキ紫トヨミタヘリ又京極中納言モ三光従三位ノトキニ紫ノ色コキヨメルニヤトミ 後撰醍醐明ノ字 思キヤ君カ衣ヲヌギカヘテコキ紫ノ色ヲキントハ

二葉ヨリ 雲井ノ乳母カ字 タキリヲバ二葉ノトキヨリメデナラザル人ナレバ雲井トヲテハ不足思トナシ タル也 後世ニ名ヲ示ス雅 露ダニモ名タヽル宿ノ菊ナレバ花ノアルジヤイク代ナルラム

おもしろくうつろひたるを給はせて
あさみとりわかはの菊を露にてもこき紫の
色とかけきやからかりしおりのひとことはこそ
わすられねといとにほひやかにほゝゑみて給へり
はつかしういとをしき物からうつくしう見奉る

雲ノ乳母

ふた葉よりなたゝるそのゝ菊なれはあさき
色わく露もなかりきいかに心をかせ給へり
けるにかといとなれてくるしかる御いきほひ
まさりてかゝる御すまひもところせけれは（二条ノ内ノ方ニ夕キリ移リ）
わたり給ぬすこしあれにたるをいとめてたくしゆり（大宮ノ古跡）三条殿に
しなして宮のおはしましし方をあらためしつらひて

白氏
鬢絲千萬白　池草八九緑
人童雅畫成　園林半喬木
君カウヘシ一村スヽキムシノ音ノシゲキノヘトモナリニケル哉

らひてすみ給ふ昔おぼえてあはれにおもふさまなる
御すまゐなり前栽どもなどちいさき木どもなりし
もいとしげきかげとなりひとむら薄も心に
まかせてみだれたりけるつくろはせ給ふやり水の水
草もかきあらためていと心ゆきたるけしきなり
をかしき夕暮のほどを二所ながめ給ひてあさ
ましかりし世の御おさなさの物語などし給ふに
こひしきこともおほく人の思ひけん事もはづかしう
女君はおぼし出づ古人どものまかでちらず
曹子曹子にさぶらひけるなどまうのぼりあつまりて
まゐりていとうれしと思ひあへり

真清水ニ大宮ノ行末ヲ尋ルヤトリヒタル心　同云　能因カ浮枕ニミシ水ハ玉ル清水ヲ云トイヘリ　ニサル清水ト云　ンカ八雲抄ニ玉世ト云ヘト
後撰ニ忘ムノ歎ミヘエヌやり水ソコ八日ニナヤシテゾ見ル　イサラ川ト云モヤリ水ナリ　浅クテ流ヲ云

なれこそはいはもるあるじ見し人のゆくへはしるや
やどのましみづ　女君
なき人のかげだにみえずつれなくて心を
やれるいさらゐの水などのたまふにおとゞ
うちよりまかで給ひける紅葉の色におどろかさ
れてわたり給へり昔おはせし御ありさまにも
おさおさかはることなくあたりあたりおとなし
くすまゐ給へるさまはなやかなるを見給ふにつけても
いとものあはれにおぼさる中納言もけしきことに
かほすこしあかみていとゞしづまりてものし給ふ
あらまほしくうつくしげなる御あはひなれど

ソノカミノ円ノ宰ヲ老木ヲ我身ニ
ヒシ小松ヲ両人ニヒニテカレニ生立
タニハ我身ハクチハテヌラントし
万代ニ八九 君コソハカメニミセニトワガフタリ立ニシ松ノ木君ヲ待ケン 八九集 古ヘフルキシキナノイハヒワ・ウヘニ小松ハコケオヒニケリ 二首同
オトコ君ノ タノ乳宰相
イヅレシモ 乳母宰相ヲ心得
後セシ 我ハヘテ猿ヒシ
峰ノ松イロトル秋ノ風
ニモ

女はみかほかたちのたぐひもなどかなからむと
みえ給へるをとこはきこえもなくきよらなりおり給
小舎人どもはれまんにおはしえそ神さびたるすがた
きこえいだされけるはなてなつかしうかなしうさ給を
御らんじ給きてうちまさまぢ給ひのされきこえ給
うちまかしけまとに松ぎみにおといひしてとの給
うれしうみの松いかは世にたくひなくらんうへし
こ松もうきおもひりなれをとこ君の御宰相のおの
めれとはらうれし御こ給もわきまえれしばかさへうえ
おかたり
いつまで我もうけようたのむかなの露まぬ給さし

十月紅宰盛士ニバ添ノ方ヘ冷泉院行幸シモ
ヨラセリ 朱雀院モ行幸
康和一年十月廿三日
村上天皇朱雀院へ行幸ノ例ヲウツセリ
馬場殿 是ハ添ノ方ニテノ用意ニ門ヨリ
ノ左右ノ近衛立添メ
ル作法

うらさびしく松のすゑはくおい人たちとなやうれたすちに
やすらおはしめさるな中納言はおもしとおもしく女君え
わいなくおもておはしえそ侍しとききて給ふ御弟見え
廿日ほどのほどすり六条院より宰相更衣の
さうわらそはうおはしまさなとびのうへきなほよ朱雀
院にもたきうちこあわて院さへわうわおりしきほ
べきまほ世なりめほらしくほわがさうことにさく
よ人もさこ給へおほし給うしおほししの院かくこ侍
心をはくしめもおやなほはこ給まうけ我をききまう給
まの時よりうくおあわてまぼむまさの殿なりたかたの
ほかなのほむまひきなとへてたかたれ心侍うちそひ

朱雀院南ノ殿ニ行幸

ゼンジヤウ　ゼジヤウトヨム　如幕ナモノヽ

御厨子所　主上ノ御膳ヲ司ル所也今日朱雀院へウツサレタルヽ

鵜飼長　院ノウカヒ両我ヽ天子ノ二朱雀ノ方ノ加ヘタルト云ヿカ又院ノ方ノ加ヘタルト云ヿカ

たるさかりの月のきちにあやめまうりまいらせ給ふよひ
うちひ給しくさはなとよそ殿上人らん殿はりま　未ノ下刻ニ
おりしもみちの程すゞしくわさ殿はみし我
きさらいみゝの舞殿まはせんしやうをひさいは
くうきれさうを殿への池の母ともうけて
ゐらしとう殿乃うちひのおきさ院の御うひ我めし
なら〜へて殿をおろさせまへつきちいさきふふとも
くひをおまさとも此はらんとかなけまとは我さ殿殿
みちのけうちうのふなん山のもみちいたうたも　扑好所
ゐまさら殿とのしのおまへいふとしなおを中の　南庭ノ
殿うのうへ我をはし中門をひさきてまわのへ

中座ニテハ天子ト朱雀トヽ

此夕カヽヒハ花人ホノ被宣ウカヒヨリ取ル魚ヲハ左近ノ府ね取次鵜飼ヨリなル雉子一番ヲハ右少府取次タルト云人ハセヒヨリ可キ出ヲウカヒヨリキ了イカヾトヨ云夫ミヤ但チツノニモ可依ニヤ又左ヲ先ヘマヲスメニヤ
康保六年七月廿一日蔵人頭近光朝臣以左馬助備中左近府生奏ノ公高右近番長播广貞佐ホツノ并ニ為飼鵜飼

なくて侍らんきさきたまふ侍座やさはまうひそて
御あ御しはは座いくさまてきせんしにてお我をせ　一天子朱雀ト内庭ニ
殿ほとめてさくやんし是とみうといおかさてわあは
いやくしさ我侍して　みをなわ殿りぬうを
なんおかしくは池乃かなてたけ我あとお殿人の
たうしひの小野よりつあうきのはたあるひと
はそひをおのさきはらてきん家のゑんうよ
おきんよ出てみりし此ひゑわみきゐひさをおい
殿う近おかきおらわせ事殿ててうしてた
ものよ朱雀みこ遠上達部なとも此まつうきをもめてう
きさはまふ侍宮のおと此をりんて侍のうきのはらき

暮方ヨリ楽初ル之能ト
ノ大ガクニハ大ガク小ガクし
トアリ
ヲガク コガクトミナラ
ハシタルトし

賀（カ）王恩（ワウヲン）トハ 楽ノ名也

子息頭勅録トキ父ノ
舞踏スル事定リタル
事也

モミヂノ賀ノ時ハ朱雀ノ
聖代ニテ一ミニセバ其時
ヲコヒシク思サントし

路へ堂へ移給ひてよなかわて普なるほと（楽所）がくのの
人めはけさとの大がくにはあくはなめしたる
ほとよ殿上のわらはべまひたりうまはやし朱雀院の（ザリ中）
御気色の案例の如く殿とおぼし出て賀王恩といふ
物よあそすなかどにあはさ御ほさきとしのたまふおとこれも
ゆわな御をちにおりたまふ（冷泉）うちのみかどは

（亥ノ日ヲ取テ玄宗賀ノ名トスルニヤ）

おかきくをわるを路て青海波のあわおかしけれ
ぬ義て路御かきわしくおわさぬあうき路御おかれ
（保）
たまさ御まうき義乃葉もおわくに袖おかへし
秋をとふらおとこれおわいおもし舞ふたち
なしひ御し路しまでも人ふれすくれたまへは
（今太政大臣）

王君ライハヒ侍テカ
慶雲寿星ノ出ルカ堯ノ生給時
紫ノ雲出タルトし徳星ト云リ
聖代ノ嘉瑞トし又禁中ヲサシ
テ紫ノ雲ト云リ 紫ハ菊ニヨセアルニヤ
古今 秋ヲヲキテ時コソ有ケレ菊ノ花ウツロフカラニ色ノミサレル
久方ノ雲ノ上ニテ見ルキクハ天ツ星トゾアヤマタレヌル

青キ赤キ白椽（ジュンビ） 此義
差別不憶 花ノ間ニ色々
ニミルセリ只装束ノ事
ト可心得 万葉ニハ
キヌキシ人ハコトナシト
ミシトキヨリキニホシク
ヲモホユ

レイノミヅラニヒタヒ計
タメドアゲニキノ額ヲ云
也舞童ノテイ也

身ながらの御心の後ろこそよなれはちかへの給おかし
さるは時雨おりわきわかずあり
紫の雲（内）より（きの）うへ子さくのむらさきなよはれ
ほのとかなる（こ）時うちけちきと聞えて路がく風吹
（添ノ位ハ）
しも紫宸殿のきこえふうはさすし義深しもよ給
わさ殿のうへみし御がふ座乃面ふかさちおりしき
わらんべ此座んあとな義殿のこゑなどふそばをよ
あをきさいつるえんとりうえひ深なとはまのおと
例此みはしにひさいさらの気をたへをてしあさき
（長ノ人ハサルトモ三十カキ七舞ナリトし）
物どもおみうふ葉はく御菜のうけありうへわ
（ソトヨム）
いはやかとことのと深くもいとわしたなわがく流など
（二ヨ中）

フデノツカサ 圖書寮也 女官ニテハ楽具ヲ預ルヽコトナド記ルヽ
宇多法師 和琴ノ名也 以檜作之 先ノ一条院ノ時内裏焼失時焼失ト云々 寛平法皇ノ御堂ノ餘リニ有此名モ云々

（太コナド乱声キキニ公

おどろくくきこえいまぞはうしのはあやうびりしまわりて
ふむのつかさにこやくものゝ物の音ぞうちならふ
うどよほ御前よりたまはせまゐらせさうの法師
のかりつぬらむとも朱雀院をとめぼしし宮に
きこしめれ

朱雀院
秋の夜の時雨ふりぬる里人もかくしもおもちの

朱雀院ノ在位ノ時ノ紅葉賀ノタメシヲ引テ

今上
わきてをしむことおほかりしにまさりける

双 朱雀ノ院在位ニハカ様ノ行幸ハナカリツルト ウラヤマシク思召サレヤト

よそのまのもみぢとやみるらんしづのたなばたに
ひろき庭のかしこきことをうち御かうち
いよいよ御びやくのかはらでたえずひくものとぞ
かくしかきうちにふるひさしくくすらぬ

夕モ同バ
東ト

三人同年十三歳ノ思七十三 天子ハ貴ヤナド也

こゝのへのうちのめでたくあそびのことなりけるひや
きりひなしにぞとわきさらんあさ座まりけるに
りしさとき給へはさへてさへこそふえはかうまゐらせ
給いとかりしけれしさうのれ上人みえしより
さふらふ中将のこゝろすぐれしわ羽さ給
べき殿におそとりなりしにほひありめわ

十三中
たまきさらん中
夕バ
夕ギリ
唱歌也
双
因縁ニユルト也